



No. 124 2021. 9. 14

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU
明石市教育委員会事務局学校教育課



コミスク TwitterQR

子どもの頃の「体験」は

未来社会を担う子どもたちの健やかな成長を確かなものにする



文部科学省から2021年9月8日、「令和2年度青少年の体験活動に関する調査研究結果報告 ～21世紀出生児縦断調査を活用した体験活動の効果等分析結果について～」が報告されました。その中で、小学生の頃に体験活動の機会に恵まれていたり、年上や年下の異年齢の人とよく遊んだり、自然の場所や空き地・路地等でよく遊んだりした経験に恵まれていると、高校生の頃の自尊心や外向性、精神的な回復力が、家庭の経済状況などに左右されることなく高くなる傾向があることが報告されました。

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_00738.html

そして研究結果から言えることとして次のようにまとめられています。

今回の研究により、これまで直感的に捉えられてきた「体験活動は、子どもの成長にとって大切な要素だ」という感覚を、確かな分析方法により裏付けることができたと考えます。例えば、キャンプやスポーツ観戦、音楽鑑賞や絵本の読み聞かせなど、様々な体験を子育てに取り入れてこられた家庭の取組や、CSR活動等の一環として教育的事業を实践されてきた企業等の取組が、確かに必要なものであったことを裏付ける結果となりました。

※CSR=企業の社会的責任

これを契機として、全ての子供たちが置かれている環境に左右されることなく、体験の機会を十分に得られるように、家庭ではお手伝いや読書の習慣を身に付けるようにする、地域では放課後などに地域の大人と遊びを通じて交流する機会を設ける、学校では社会に開かれた教育課程の実現を目指して地域と連携しつつ体験活動の充実を図るなど、地域・学校・家庭が協働し、「多様な体験を土台とした子どもの成長を支える環境づくり」を進めていくことが、よりよい社会創りにつながると考えます。

そして報告の概要版には次のように書かれています

社会全体で子どもたちの成長を支えていきましょう

★多様な形で「体験」の場や機会をつくっていくことが重要です

小学生の頃に経験した「体験活動」（自然体験、社会体験、文化的体験）「読書」「遊び」「お手伝い」とその後の意識の関係を分析した結果、それぞれの体験の特性によってその後の意識に異なる影響が見られることが分かりました。

そのため、子どもの健やかな成長を確かなものにするためには、何か1つの体験をする

のでなく、多様な体験をすることが必要になると考えます。

また、体験する機会がよくある子どもは、家庭の収入や親の学歴が高い傾向にあることなどが背景にあると考えられますが、収入の水準が相対的に低い家庭の子どもであっても、体験活動などをよくした子どもはその後の成長に良い影響が見られることが示唆されました。そのため、全ての子どもたちが様々な体験にチャレンジできるよう、周りにいる大人が「意図的」「計画的」にその機会や場を設けるようにすることが大切です。

★できることから連携してやっていきましょう

今後は、全ての子どもたちが置かれている環境に左右されることなく、体験の機会を十分に得られるように、みなさんで力を合わせて「多様な体験を土台とした子どもの成長を支える環境づくり」を進めていくことが重要です。

そのためにできることとしては、家庭ではお手伝いや読書の習慣を身に付けるようにする、地域では放課後などに地域の大人と遊びを通じて交流する機会を設ける、学校では社会に開かれた教育課程の実現を目指して地域と連携しつつ体験活動(自然体験・社会体験・文化的体験)の充実を図るといったことなどが考えられます。

こうした取組を通じて家庭・地域・学校が連携し、社会全体で子どもたちの成長を支えていきましょう。

概要版：https://www.mext.go.jp/content/20210908-mxt_chisui01-100003338_1.pdf



この概要版を読みながら、生涯学習を見据えたカリキュラムマネジメントの必要性や、非認知能力を子どもたちが身に付けていくには、題材をとおしての非認知能力の育成を意図した指導だけではなく、様々な体験や人との交わり等子どもたちが浸れる環境が必要なのだと感じました。

これまで授業をするにあたって1時間の“めあて”をたて、その“めあて”を達成するために発問とか板書等授業内容を考えてきました。それが当然のことであり、現在もそうした視点での研究に取り組んでいます。ただ、新学習指導要領の中で、これからの学びのあり方として一人一人の理解状況や能力等に合わせて個別に最適化された学びを行っていくとして「個別最適化学習」が打ちだされてきました。その背景には、共通しためあてだけではなく、一人一人の理解状況や能力等に合わせ学べる仕組みや、様々な体験や人との交わりに子どもたちが浸れる時間を大切にしようとする流れがあるのだと考えます。それは学校だけでとどまるのではなく、生涯学習という視点を持ちながら、様々な体験や人との交わりに子どもたちが浸れる時間が

地域・家庭とシームレスにつながっていくことが必要だと、この報告から私は読み取ります。それが、私自身の中での最新の「社会に開かれた教育課程」のイメージです。「学び」に壁をつくらないで、シームレスにつながっていくためにも、この報告をベースに学校・地域・家庭でどのような「学び」の仕組(環境)を創っていくかの対話を始めることが必要ではと考えます。(文責:北本)

